



中部の

エネルギーを 築いた



日本の電力王・福沢桃介

PART1 中部経済圏の礎を築いた福沢桃介 — その2

福沢桃介は、1910(明治43)年に名古屋電灯の取締役を経て常務取締役に就任し、本格的に電気事業界に入った。その後、前号で紹介した「福沢桃介追憶碑」の建立に協賛した大同

電力、東邦電力、名古屋鉄道、矢作製鉄、大同製鋼などの設立に係わった。

今回は、これらの会社を中心に中部経済圏に登場し、活動した後半生を紹介する。

名古屋電灯から東邦電力

桃介が電気事業に携わるようになったのは、小規模な火力発電から水力発電、いわゆる「水主火従」の時代に入った頃である。

当時、名古屋電灯のライバル会社であった名古屋電力は、木曾川に初めて八百津発電所の建設を進めていたが、工事が難航し資金繰りが続かず吸収合併され、名古屋電灯により完工した。このことが両社の間にしこりを残し、わずか半年後に桃介は辞任してしまった。その後、収支は改善されず株主の間から経営刷新の声が高まり、懇願されて再度、名古屋電灯の経営に復帰した。

1914(大正3)年、社長に就任した桃介は「互戒十則」を定め経営再建に取り組んだ。その内容は現在でも相通じるものが多い、それは

- ①吾々の享くる幸福は十万需要家の賜物なり
- ②吾々は寸時も需要家の恩恵を忘却すべからず
- ③需要家の主張は常に正当なり、懇ろに応接すべし
- ④故障を絶対に予防し、需要家に満足を与へべし
- ⑤時間と労力は貴重なり、最も有効に使用すべし

⑥その日に為すべき仕事は翌日に延ばすべからず

⑦細事もゆるがせにする勿れ、一物をも損なう勿れ

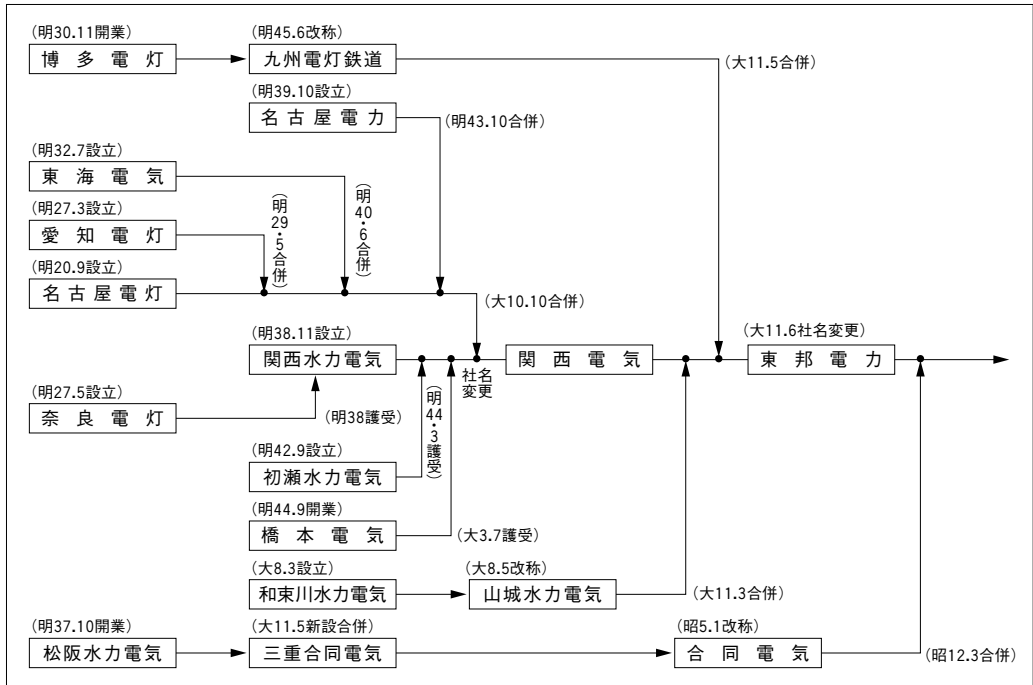
⑧議論と形式は末なり、実益を挙ぐるを本とせよ

⑨不平と怠慢は健康を害す、職務を愉快地に勉めよ

⑩会社の盛衰は我々の双肩にあり、協力奮闘せよ

その後、電灯電力の急増により木曾川、矢作川の水力開発に力を入れ始め、1920(大正9)年、奈良に本拠を持つ関西水力と合併させ、関西電気(株)に改称し、翌年、福岡に本社を置く九州電灯鉄道と合併した。この時点で桃介は辞任し、九州電灯鉄道の伊丹弥太郎が社長に、松永安左エ門が副社長に就任した。そして社名を一般公募し、東邦電力株式会社とすることを決め、本社を東京に移した。東邦とは「東の邦」すなわち日本を指し、「光は東方より」という意味も込められている。これは一地域の電力会社ではなく日本の電力会社を目指したものである。

資料1 東邦電力株式会社沿革図



桃介の夢・鉄道事業(現在:名古屋鉄道株式会社)

桃介は東京・大阪間に電気機関車による高速電車を走らせる夢・現在の幹線構想を持っていた。当時の鉄道院総裁後藤新平を説得し、1919(大正8)年、安田財閥を築いた安田善次郎と合弁会社・東海電気鉄道株を設立し社長に就任し、名古屋―豊橋間の工事に着手した。こうした折、安田善次郎が暴漢により刺殺されたため、事業は暗礁に乗り上げ、桃介は社長を退き、経営を藍川清成に譲った。その後1922(大正11)年に愛知電気鉄道と合併

した。愛知電気鉄道は、1910(明治43)年に創立され、1917(大正6)年に神宮前～有松間が開通し、1927(昭和2)年に神宮前～豊橋間が開通した。当時、東海道本線の熱田～豊橋間は110分要したが、愛知電気鉄道の特急電車は、所要時間63分、時速59^{キロメートル}で日本一の高速であった。さらに1935(昭和10)年に新名古屋～新岐阜間の名岐鉄道株と合併し現在の名古屋鉄道株になった。

日本のマンチェスター構想

桃介は、名古屋を日本のマンチェスターにしようとする構想を持っていた。水力発電の電源開発を進めれば、その消費量の拡大を図る必要がある。このため電力を大量に消費す

る重化学産業を計画した。

(1)名古屋電灯から製鉄・製鋼事業の事始め
(現在:大同特殊鋼株式会社)

1915(大正5)年、名古屋電灯の製鋼部門を

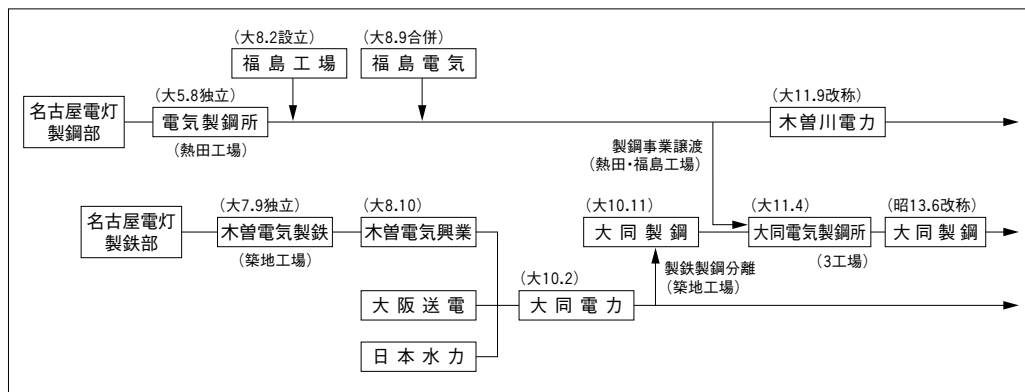
独立させ(株)電気製鋼所の社長に就任した。そして欧州から帰国した寒川恒貞技師に余剰電力の活用を命じ、日本最初の工業生産用工ル一式電気アーク炉1.5トンを造り、フェロアロイ等の生産を始めた。

また、1917(大正7)年に製鉄部門を独立させ木曾電気製鉄(株)を設立し社長に就任した。この会社は木曾川で開発した水力電気をもとに製鉄工場を名古屋港5号地(現在：築地テクノセンター)に建設し操業を開始した。しかし第一次世界大戦後の不況も重なり製鉄事

業を中止し、翌年、木曾電気興業と改称した。

その後1921(大正10)年、次号に述べる大同電力(株)が設立された。大同電力は、製鉄製鋼部門を独立させ大同製鋼(株)を設立した。そして翌年、電気製鋼所にあった熱田、木曾福島の2工場を譲り受け(株)大同電気製鋼所となり、寒川恒貞が社長に就任した。その後大同製鋼(株)と改称し、現在特殊鋼で世界一のメーカー大同特殊鋼(株)になった。なお、大同電気製鋼設立までの経緯は資料2のとおりである。

資料2 大同電気製鋼設立までの経緯 ー木曾電気製鉄・電気製鋼所の関係ー



(2) 電気製鋼の新事業としての炭素製品

(現在：東海カーボン株式会社)

1918(大正7)年、東海電極製造(株)が設立され、桃介が相談役、寒川恒貞が社長に就任した。また、寒川は、川崎舎恒三(後に大同製鋼副社長を経て相談役・特殊鋼の製造と国産電気炉の開発に寄与した工学博士)を招へいし、常務取締役として短期間のうちに生産体制を整え、名古屋工場(当時：名古屋市郊外御器所村字上赤島)を立ち上げた。

この頃、炭素製造の主要な分野を占める製鋼用電極及び電解ソーダ用電解板の製品は、米国アチソン社に依存していた。このため、寒川は将来の電気製鋼事業と電力分野の発展による炭素製品の需要拡大を予想して、独立

の事業として発足させたものである。

会社設立趣意書には「……本邦電気化学工業会の殷盛に伴い、必然的に需要を喚起するものは電極材料にして、これが品質の如何は直ちにこの種工業の成否に關すというも敢えて過言にあらず。されば吾人はここに見る所あり。最も優秀なる電極材料を供給し、一般電炉工業並に電解工業の発達を助成し、当業者を裨益すると共に当社亦其利益を享有せんと欲す。是れ当社設立の趣意に外ならず。」と記述されている。まさに時代の背景と創業者の抱負が的確に表現されている。

このように製鋼用電極を中心に炭素製品メーカーとして発展した。戦後、カーボンブラックをはじめ電極以外の製品も多くなり、1975

(昭和50)、総合カーボンメーカーとして東海カーボン㈱に社名を変更した。

(3) 矢作水力から電気化学事業の事始め

(現在：東亜合成株式会社)

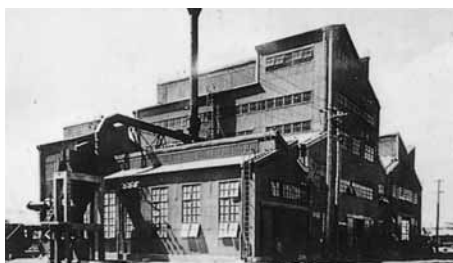
1931(昭和6)年、桃介は名古屋港埋立地7号地(現在：名古屋市港区昭和町の昭和埠頭)に工場用地を取得した。矢作水力は7号地埋立地のうち95,172平方メートル(28,840坪)を買収した。

矢作水力㈱は、矢作川水系の電源開発を目的に1919(大正8)年、設立された。桃介は相談役、取締役社長には長男の福沢駒吉が就任した。創立後から事業を拡大して、岩村電気軌道(1920年)、南信電力(1927年)、天竜川電力(1931年)、白山電力(1933年)を次々に合併吸収していった。なお、天竜川電力は、天竜川全域を総合的に開発するため、9地点全部の水利権を得て1926(大正15)年に設立され、桃介が取締役社長に就任していた。

矢作水力設立直後に、矢作工業が設立され駒吉が社長に就任した。この間に、矢作工業は全設備や工事を引継ぎ、アンモニア、硫酸、硫安、硝酸の生産を始めていった。特に、電解法によるアンモニア原料水素の製造には多量の電力を消費した。

1940(昭和15)年、矢作工業は原材料の電力が国家管理になり、円滑な事業の維持が困難になったため、矢作水力に吸収合併された。しかし矢作水力も解散の事態に追込まれた。その直後の1942(昭和17)年、第2次矢作工業㈱が設立され、これをもって東亜合成の創立とした。

戦時体制下の1944(昭和19)年、矢作工業は昭和曹達・北海曹達・レーヨン曹達の各曹達会社を吸収合併し、社名を東亜合成化学株式会社と改称し、福沢駒吉が取締役社長に就任した。その後、1994(平成6)年、創立50周年を機に、社名を現在の東亜合成㈱に変更した。



矢作製鉄創業時の建物

(4) リサイクル事業の事始め

(旧：矢作製鉄株式会社)

名古屋における桃介が関係した最後の会社が1938(昭和13)年に設立された矢作製鉄㈱である。

矢作工業の硫酸製造過程で発生する硫酸滓が貴重な鉄分を多量に含有することから、これを鉄源とし矢作水力の余剰電力を用い、大同電気製鋼所の協力を得て、電気製鉄を企業化したものである。折しも戦時体制に向けて、国による民間製鉄事業の奨励、振興の時期と重なるものでもあった。また、この未利用廃棄物の有効活用は、資源の乏しいわが国での初の試みであり、今日のリサイクル事業の初めでもあった。

同社は、矢作水力から名古屋港7号地埋立地のうち約16,000坪を譲受け、製鉄用電気高炉などの設備の建設に着手し、翌年5月操業を開始した。その後、終戦により操業を一時停止したが、戦後すぐ鑄造溶解作業などを再開した。そして1961(昭和36)年に、新高炉などを建設し発展したが、1998(平成10)年、鉄鋼需要が伸びず破産し、閉鎖に追い込まれた。

参考までに、矢作製鉄創業時の7号地埋立地には、

- ① 矢作水力・名古屋火力発電所(現在：中部電力昭和町変電所)
- ② 矢作工業および昭和曹達(現在：東亜合成)
- ③ 大同機械(名古屋造船所、石川島を経て現在愛知機械などが所在)などの工場があった。

(寺澤安正)